歴史館まつり・歴史館シンポジウム『中世東国における内海世界』

８月１９日に，歴史館まつりの第１日目行事として，シンポジウム『中世東国における内海世界－霞ヶ浦周辺の新しい歴史像を描く－』を実施し，約２００名の茨城県内外の参加者を得て，盛況のうちに終了することができました。

本シンポジウムを企画した理由は，副題－霞ヶ浦周辺の新しい歴史像を描く－にありますように，本県の南部に広大な面積を持つ霞ヶ浦やその周辺について，中世という時代にはどのような特徴があったのか，とくに現在とは異なって「内海」であり，流通・交通の要地であった霞ヶ浦という視点から，新たな歴史像を描いてみたい，ということでした。これは，現在の霞ヶ浦の抱えている様々な問題，たとえば水質汚濁や，一昨年の鯉ヘルペスの流行などにみる環境悪化に対し，歴史的に霞ヶ浦問題を検討し，その再生の一助にしたいという，歴史学からの提言も意図していました。

基調講演他，４本の報告は次の通りです。

基調講演「内海論からみた中世の東国」（高知大学教授市村高男氏）

報告①「古河公方領国における流通－馬・船・商人－」（当館首席研究員内山俊身）

報告②「中世霞ヶ浦をめぐる宗教世界－律宗の布教活動を中心に－」（福岡大学助教授桃崎祐輔氏）

報告③「常陸・下総の武士勢力と交流－金砂合戦の評価をめぐって－」（茨城大学教授高橋　修氏）

報告④「発掘された中世城館からみた常陸」（国立歴史民俗博物館教授小野正敏氏）

市村基調講演では，中世において非農業生産の比重の高かった東京湾・霞ヶ浦周辺の特質が指摘され，近世初頭の利根川東遷事業での交通体系の変化に伴い霞ヶ浦地域の豊かな発展基盤が失われた事情，さらに以上をふまえ，霞ヶ浦の再生への歴史学からの提言がなされました。

内山報告では，東京湾と霞ヶ浦の水運をつなぐ位置にあった戦国時代の古河公方領国の特質が，そこで活動した商人・交通業者の存在から指摘され，中世霞ヶ浦の位置が東国全体の中で位置づけられました。

桃崎報告では，寺院史・仏像・考古資料から，忍性による鎌倉時代後半の旧仏教律宗の東国への布教が，首都鎌倉に先立って，つくば市小田の三村山極楽寺や霞ヶ浦周辺でなされていた事実が指摘され，中世霞ヶ浦のもっていた先進性が高く評価されました。

高橋報告では，平安時代末期に佐竹氏が霞ヶ浦に進出していた理由が，奥州藤原氏の京都への貢納ルートや，そこを基盤とする上総氏・千葉氏との競合から説明され，源頼朝が佐竹氏を討った金砂合戦が，その後の奥州合戦の前哨戦で，特異な合戦であると，霞ヶ浦世界を視野に入れて評価されました。

小野報告では，中世考古学の成果から，東国武家の館空間の在地指向と都指向の２モデルが示され，霞ヶ浦に近いつくば市の小田城や小泉館の発掘成果から，この地域が強い都

指向をもっており，東国の他の地域にはないその特異性が指摘されました。

その後，参加者からの質問をもとに，テーマを統合するパネルディスカッションが行なわれ，講演・報告内容の深化とその関連性の討議が行われました。

このシンポジウムの内容は，平成１９年８月に，茨城県立歴史館編集で『東国の内海世界－中世の霞ヶ浦・利根川・筑波山－』（高志書店）として刊行される予定です。

（会場風景写真）